

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

施設番号	66-0732
施設名	敬愛桃の実保育園
施設所在地	町田市小山ヶ丘3-28
法人名	社会福祉法人 敬愛学園

1. 活動のテーマ

<テーマ>

【感触あそび】

色々な素材にふれ、五感を刺激し活動を楽しむ。

<テーマの設定理由>

・感触遊びの保育活動を通して、五感や手指の発達を促したり身の回りへの興味関心を高めることができれば良いと考えたため。

2. 活動スケジュール

5月：葉っぱを握ろう・砂遊び・水にふれよう
6月：ボディーペインティング・水にふれよう
9月：氷あそび
11月：栽培『しいたけ』にふれる
12月：葉っぱにふれる・米粉粘土
2月：絵の具遊び
3月：感触遊び(スライム・寒天)

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

(活動のためにどのような環境を設定したか、準備した素材や道具)

・絵の具 ・筆 ・ローラー ・米粉 ・ビニール袋 ・ビニールテープ
・ビーズ ・水 ・圧縮袋 ・氷 ・寒天 ・スライム
・スプーン ・バッド

<活動の内容>

・戸外遊びで葉っぱや木の実など自然物にふれる。
・手や全身を使って絵の具やスタンプなどで遊ぶ。
・玩具や自然物を一緒に凍らせた氷にふれて冷たさや感触を感じる。
・買い出しから一緒に行き、米粉粘土で感触の変化を楽しむ。
・水にふれる活動を室内からはじめ、だんだんとダイナミックに遊べる環境へと段階を踏んで移行した。

(活動の内容、活動中見られた子どもの姿、保育者との関わり等)

- ・ はじめての活動では躊躇する様子が見られたが、短時間からはじめ回数を重ねるごとに活動を楽しむ姿が増えていった。また準備をしている段階で気づき " はやくあそびたい！ " とアピールする様子が見られた。
- ・ 5月から室内やエントランスにレジャーシートを敷いて水にふれる活動を取り入れた。桶に張った水にふれるところからはじめ、水の冷たさや勢いよくふれることで溢れる水の様子を楽しむ姿が見られた。自ら水にふれるお子さまも増えてきたところで、水遊びがはじまり、全身を使ってのびのびと活動に参加していた。
- ・ 何でもふれて、口の中に入れて確かめようとする姿も見られるので保育者が側に着き、少人数で行うようにした。「つるつるだね」「つめたいね」「てにくっついたね」など、感触や状況を言葉にして伝えた。その言葉を聞いて「つるつる」と言葉を真似たり、保育者が一緒に活動を行う様子を見て、手を伸ばしてふれるお子さまの姿が見られたりした。
- ・ 絵の具遊びでは絵の具やタンポにふれることを嫌がるお子さまもいたが、友だちや保育者が活動を行っている様子を興味を持って眺めたり、タンポから筆に道具を変えると自ら手を伸ばして活動に参加していた。また保育者が「〇色になったよ」と自分の手に筆を使って色付けをすると、真似て保育者の腕に色付けをしていた。
- ・ 感触あそびらぼでは、スライムの感触は好みではないお子さまが多かったが、バッドに大きめの寒天を入れたものと、玩具のナイフやスプーンを準備すると寒天を切ったり、スプーンに乗せて友だちや保育者に食べさせる真似をしたりとごっこ遊びへと繋がっていた。



5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

初めての活動でためらうお子さまもいたが保育者が一緒に行ったり、繰り返し活動を行ったりすることで自ら遊ぶ姿が見られた。また水遊びや氷遊びでは、お部屋の中で水や氷にふれる活動からはじめ、指先から全身へ、種類を増やしていくなど段階を踏んで行うことで親しみを持って活動に参加することができていた。口に入れて確かめる時期でもあるので、安全面に配慮しながらお子さまと一緒に楽しむ姿勢が大切であり、さまざまな素材にふれることで感触の違いを感じたり、掴む、摘まむ、握る動作を繰り返すことで、五感や手指の発達が促されると感じた。

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

施設番号	66-0732
施設名	敬愛桃の実保育園
施設所在地	町田市小山ヶ丘3-28
法人名	社会福祉法人 敬愛学園

1. 活動のテーマ

<テーマ>

【1歳児 色遊び】

- ・色遊びを通して、お子さま自身の発見を大切にしていく。
- ・絵の具、スタンプ、色水などに触れ、手や指で感触を味わう。

<テーマの設定理由>

（テーマに関する子どもの興味関心、園の特色など）

- ・“どんな色がすき”の歌や絵本・ペープサート等を繰り返し楽しむ中で、色に対する関心が高まり、気になる色に視線を向けたり指差しで知らせたりする姿が見られた為。
- ・赤や青・黄色など、簡単な色の違いに気づく経験を通して、視覚的な認識や言葉の関心が育ち始めていた時期の為。

2. 活動スケジュール

7月4日	ボディーペインティング	11月12日	手形スタンプ
7月10日	オクラスタンプ	12月12日	どんぐり転がし
7月23日	スライム遊び	3月25日	感触遊びらぼ（寒天）
9月19日	朝顔の花で色水遊び		
10月10日	なかよしプレイデイ	クレヨンオブジェ遊び	

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

（活動のためにどのような環境を設定したか、準備した素材や道具）

- ・模造紙・ローラー・絵の具・オクラ・画用紙・ビニール袋・朝顔の花
- ・クレヨンオブジェ筆・バット・手形スタンプ・どんぐり・風船・スライム・寒天

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

- ・『色』に興味を持ち始めた1歳児クラスでは、絵の具を用いて栽培したオクラでスタンプ遊び、スライム遊び、手形スタンプを行い、様々な素材や方法を取り入れた。
- ・ボディーペインティングでは、絵の具を塗り広げながら、色が混ざり合う様子を体験した。
- ・スタンプ遊びでは、野菜や自分の手を介して、紙に色が付くことや模様の重なりを体験し、自由に表現していた。
- ・スライム遊びでは、色への興味と共にこねたり伸ばしたりして形が変化していく楽しさを知った。
- ・夏に育てたあさがおの色水遊びでは、花を育て、自分で摘み、水を加えて揉むことで色が出てくる経験をした。朝顔の色水にコーヒーフィルターを浸して色が染み込む様子を見た。

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

- (活動の内容、活動中見られた子どもの姿、保育者との関わり等)
- ・絵の具を使った絵画造形活動では、保育者が様々な色を準備して選べる環境を作っていくことで、お子さまが自ら関わろうとする姿を大切にしながら見守った。絵の具に直接触れることに抵抗感のあるお子さまには筆を使ったり、保育者が触れる様子を見たりしながら個々の興味や関心に寄り添った援助を行った。「どうなるかな?」「きれいだね」などと声をかけることで、そのお子さまなりの気づきを大事にした。また、全ての活動でお気に入りの色を選択できる環境を作ったことで活動への興味の幅が広がっていった。
 - ・何度も繰り返し行う中で色への興味が広がり遊び方に慣れ、色が混ざる様子を見て手を止めてじっと見つめたり、「あか」「あお」と言葉にしたりする姿が見られた。保育者や友達と一緒に「まぜるとどうなるかな?」と関わる中で、色の変化や絵の具・スライムの感触を共有し、「きれいだね」と笑顔を見せ合いながら発見を喜んでいた。その経験が楽しさにつながり、次の色遊びでも自ら進んで関わろうとする姿が見られた。



5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

・色遊びを繰り返し行う中で、当初は絵の具の感触に戸惑いを見せていたお子さまも、徐々に自ら手を伸ばして触れようとする姿へと変化が見られた。また、色の混ざりや広がりを感じ、指差しや簡単な言葉で保育者や友だちに伝えるなど、発見を共有しようとする姿も見られるようになった。

・保育者がお子さまの気づきに寄り添い、言葉を添えて関わることで、安心して表現する姿や主体的に遊ぶ姿につながったと考えられる。これらの経験を通して、感覚を通じた気づきや言葉への関心、他者と関わろうとする気持ちが育まれた。

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

施設番号	66-0732
施設名	敬愛桃の実保育園
施設所在地	町田市小山ヶ丘3-28
法人名	社会福祉法人 敬愛学園

1. 活動のテーマ

<テーマ>

【2歳児 自然】

- ・生き物のお世話を通して命の大切さを知る。
- ・自然物の名前や生き物の特性を知り、関心を広げる。

<テーマの設定理由>

(テーマに関する子どもの興味関心、園の特色など)

- ・1歳児の時から生き物が好きで他クラスの飼育の様子を見ていた。
- ・カマキリ、バッタ、カブトムシのエサがかごに入っているか、動いているのかを毎日確認し、生き物の様子を観察していた。

2. 活動スケジュール

4月9日～6月	オタマジャクシからカエルに成長する過程の観察
4月～9月	カブトムシの飼育
6月24日	蝶々の飼育
8月	カマキリ、バッタの観察
10月16日	多摩動物公園(昆虫館)
12月19日	生き物に関して調べもの
3月	オタマジャクシの観察

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

(活動のためにどのような環境を設定したか、準備した素材や道具)

- ・カブトムシ・ゼリー・土・飼育ケース・ipad・オタマジャクシ・バッタ・カマキリ
- ・蝶々の幼虫・図鑑

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

- ・昨年の2歳児がカブトムシの幼虫を飼育していた。進級とともに引継ぎ、飼育をした。
毎日プラスチックのスプーンでカブトムシのフンをすくって掃除をしたり、霧吹きで水をあげお世話をした。
- ・おたまじゃくしは近くの小さな池で見つけ、園に連れて帰った。足が生えて来た時には虫眼鏡を使って観察をした。
- ・蝶々の幼虫をいただき、飼育ケースで観察した。幼虫になる様子を見届けた。
- ・遠足はお子さまが興味を持った蝶々などを見れる昆虫館の見学を楽しんだ。

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

(活動の内容、活動中見られた子どもの姿、保育者との関わり等)

- ・春から秋ごろにかけて長い時間お世話をすることでカブトムシに対して愛着が湧いていた。少しでも餌がないと「もうごはんがないよ!」「おなかすいちゃう!」と心配する姿が見られた。
- ・カブトムシが幼虫の時には、進んで水をあげたりフンを掃除したりしていたが、カブトムシが成虫になるとお世話をしなくなった。保育者が「カブトムシさん見てみる?」と聞くと「こわい」と言い成虫になったカブトムシを見て怖がる姿が見られた。
- ・カブトムシだけでなく他の生き物にも興味を持ち、カマキリやバッタの飼育もした。「ごはんはなにをたべるのだろう?」と疑問を持つお子さまもいた。“なんだろう?”と疑問に思ったことをすぐに解決できるように、図鑑やipadでお子さまと一緒に調べた。
- ・クラスで飼育した蝶々と図鑑に載っている蝶々を見比べ、「きいろだね」「こっちはくろだ」と色の違いを発見していた。
- ・春(2025年3月)に池から連れてきたオタマジャクシを覚えていた。2026年の3月にオタマジャクシのいる池に散歩にいくと「おたまじゃくしいるかな?」と保育者に聞く姿が見られた。



5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

- ・昨年度から生き物に興味を持ち長い期間、お世話をすることで命の大切さに気が付くお子さまや生き物に対して優しい気持ちを育んでいた。
- ・飼育をルーティーン化しているお子さまがいた。
- ・お子さまが疑問に持ったことをipadですぐに調べられ、保育の幅が広がりお子さまにとって“知りたい”という意欲に繋がっていた。
- ・虫が苦手なお子さまは、カブトムシの幼虫が土に潜り姿が見えなくなると水をあげたり、フンの処理をしていた。虫は苦手だが“お世話をしたい”という気持ちがあることに気が付いた。